

調査研究終了報告書

研究分野：自然環境と生物多様性の保全に関する研究

調 査 研 究 名	福岡県内に生育する希少植物の保全生態学的研究
研究者名（所属） ※ O印：研究代表者	○須田隆一（環境生物課）、真鍋 徹（北九州市立自然史・歴史博物館）、薛 孝夫（九州大学大学院農学研究院）、曹 瀬化・六田宗一郎（九州大学大学院生物資源環境科学府）、清水英幸（国立環境研究所）
本 庁 関 係 部 ・ 課	環境部・自然環境課
調 査 研 究 期 間	平成15 度 — 17 年度 （3 年間）
調 査 研 究 種 目	1. ☒ 行政研究 ☐ 課題研究 ☒ 共同研究（共同機関名： ） ☐ 受託研究（委託機関名： ） 2. ☒ 基礎研究 ☐ 応用研究 ☐ 開発研究 3. ☐ 重点研究 ☐ 推奨研究 ☐ I S O 推進研究
ふくおか新世紀計画 第2次実施計画	大項目：地球的視野に立った快適環境の保全と創造 中項目：豊かな自然環境の保全と創造 小項目：参加による自然環境の保全と創造自動車交通公害対策の推進
福岡県環境総合基本計画 (P20,21) ※環境関係のみ	柱：自然環境の保全と創造 テーマ：生物多様性の保全、希少野生生物の保護 静かな居住環境の確保
キ ー ワ ー ド	①希少植物 ②ガシャモク ③ハンノキ ⑤ハマボウ ⑥リュウキンカ
研 究 の 概 要	
1）調査研究の目的及び必要性 福岡県内には、現在、国内で唯一自生が確認されている希少水生植物ガシャモクの生育地がある。また、県内で1ヵ所のみ自生する希少湿生植物の一つに1999年に発見されたリュウキンカがある。しかし、これらの植物の生育条件や繁殖特性などは明らかになっていない。さらに、県内には、湿生林として低湿地にハンノキ群落、河口域にハマボウ群落が点在しており、これらの樹木も希少植物に選定されているが、分布実態などに関する情報は十分に得られていない。そこで、本研究は、これらの希少植物を対象として、県内分布の実態を把握するとともに、生育に適した環境条件や繁殖特性などを解析し、保全・管理手法を検討することを目的とする。	
2）調査研究の概要 ①分布実態の把握：県内分布の現状を明らかにするとともに、生育個体数と生育立地との関係などを解析する。 ②生育条件及び繁殖特性の検討：継続植生調査及び環境計測などを行い、生育に適した環境条件などを検討する。また、開花、結実、実生更新状況など繁殖に関する項目の調査を行い、繁殖特性について検討する。 ③保全・管理手法の検討：分布実態、生育条件、繁殖特性などの調査・解析結果に基づき、保全・管理手法について検討する。	
3）調査研究の達成度及び得られた成果（できるだけ数値化してください） ガシャモク個体群の衰退は現在も続いており、生育に影響を与える要因として透明度の低下や泥土の堆積などが考えられた。 ②県内で約1,000個体のハンノキを確認した。ハンノキ群落は多くの生育地を失っており、残存する群落も谷底低地に生育する群落においては照葉樹林要素が群落内に侵入し、衰退する傾向がみられた。 ③県内で約4,000個体のハマボウを確認した。ハマボウ群落は河口では大群落の場合が多かったが、海岸の群落は全て10個体以下の小群落であった。 ④リュウキンカは湿原内において、地表に水が流れてオオミズゴケが少ない部分、光条件が良好な部分など限られた場所での生育、結実であった。	
4）県民の健康の保持又は環境の保全への貢献 ガシャモクは国内では福岡県内のみ自生が確認されている希少植物である。本研究の結果、本種の生育条件及び繁殖特性が部分的ではあるが明らかになり、保全・管理にあたっての科学的知見が得られた。他の対象植物についても保全に関する新たな知見が得られ、生物種に着目した保全対策に貢献する。	
5）調査研究結果の独創性、新規性 本研究の対象植物については、現在までに生育条件及び繁殖特性などの保全生態学的知見がほとんどなく、本研究により新知見が得られた。特にガシャモクは、現在、千葉県手賀沼などで再生・復元の取り組みが行われており、今回の調査結果を公表することは、地域に根ざした調査研究機関の役割でもある。	
6）成果の活用状況（技術移転・活用の可能性） 埋土種子（地中で休眠状態で生存し続けている種子）によるガシャモク再生・復元の取り組みは、かつての自生地である手賀沼で行われているほか、琵琶湖などでも計画されており、生育条件、繁殖特性に関する情報は、これらの取り組みに活用される。	